

〈特集〉 教員・学生との結び付き：メディアセンターの新たな取り組み

特集によせて

みやぎ
宮木さえみ

(メディアセンター本部事務長)

今号の特集テーマは、「教員・学生との結び付き：メディアセンターの新たな取り組み」です。これまでも、メディアセンターは教員・学生とさまざまな形で協力関係を築いてきました。伝統的なところでは、選書に関しては多くの先生方に協力していただいております。メディアセンターの貴重な資料の展示会などでは企画監修をお願いしています。また、学生達はアルバイトとして働いてくれている、購入希望を出すことによって、選書に協力してくれています。最近では、学生による選書ツアーも行っていますので、メディアセンターとのさらに強い結び付きが生まれてきていることでしょう。

今回の特集では、これまでの協力関係とは少し視点を変えて、教員や学生との結び付きがメディアセンターの新たなサービスの可能性を生み出している例を紹介します。梁瀬さんの記事は、3つのメディアセンターが行っている事例を紹介したものです。理工学メディアセンター前所長の椎木一夫名誉教授は、理工学メディアセンターを活動の場として、学生達が自主的に行っているS-Circleを「図書館の一つの将来方向を示すもの」として紹介されています。酒見さんの記事は、各メディアセンターが行っている学生向けの読書推進活動を概観しながら、これらの活動の成果をメディアセンターのサービスにどう活かすかということを描いています。長坂さんは湘南藤沢メディアセンターのライブラリーフレンズ制度について紹介していますが、これはまさに学生の視点をサービスに活かす制度と言えましょう。最後の市古さんの記事は、研究戦略にかかわる教員に協力して、理工学部の研究に関する分析を行った報告です。ここでは、教員とメディアセンターの結び付きが図書館員の仕事の枠を拓く可能性があることを示唆しています。

これらの取り組みが新しいサービスとして、定着するのか、または、定着させるべきなのかについては、

もう少し時間をかけて成果を見なければならぬと思います。メディアセンターの役割は、私達がホームページにおいて宣言しているように、「学術情報を収集し組織して提供することにより、慶應義塾大学における教育・研究・医療活動を支援すること」であり、「蓄積した学術情報資源を保存し、文化の担い手として後世に伝えることにより、国内外の学術活動に貢献すること」です。この基本の使命の上に立ち、新たなサービスの試みとその成果がこの使命に対していかに有効かという観点から、将来の方向を考えていければと思います。